

関東軍の無策に怒る

—「嗚呼 満蒙開拓団」を観て—

吉川 健

私は元満州電電社員（通信手）で新京におりましたが、昭和20年6月熱河省承德電報局に転勤しました。当時17歳でした。

8月9日ソ連の侵攻により承德在の関東軍西南防衛軍司令部はさっさと錦県に後退、私たちは取り残されました。8月19日ソ連モンゴル連合軍が隣の駅まで来たという情勢によりトラックで錦県に脱出しようとしたのですが、途中建昌という山の中で捕らえられてしまいました。

それからの苦難の道のは省略しますが、私たちの抑留列車（貨車）がハルピンの駅構内に何日も停車していた時、遠くの道路を麻袋や箆を体に巻きつけた大勢の人がぞろぞろと歩いて行く光景を見ました。その人たちが日本人だということは分かったのですが、日本人がなぜあんな恰好をしているのか、どこから来たのか、私たち自身どこへ連れて行かれるのか疑心暗鬼の時でしたので、深く考えることもなかったのです。後になっていろいろ資料を読むにつれ、あの人たちが奥地から逃れてきた開拓団の人たちだったということが分かりました。

満蒙開拓団の悲劇については、方正開拓団をはじめ多くの資料を読んでおりますが、方正県の日本人公墓の事は、映画『嗚呼 満蒙開拓団』を見て初めて知りました。北満の荒野に罪もない幾万の人たちが朽ち果て、そして野ざらしになったことを思うとき、私は涙を禁じえませんでした。

悲劇の原因の大部分が関東軍の無策に起因するものであることに深い憤りを感じるのは私だけではないでしょう。それらの資料の中で私が一番心を打たれたのは、詳しいことは忘れましたが、「天皇の世紀」満州編で読んだ熊本開拓団の最期でした。押し寄せる暴徒に抗しきれず鐘を合図に猛火の中に婦人子供全員飛び込んだという最後です。また日中国交回復後に始まった残留孤児の帰国問題についても、私のように元満州にいた者は特にかわいそうだという気持ちが深いと思います。

終戦当時17歳だった私もすでに82歳、先輩同僚の多くが既に鬼籍に入りました。開拓団悲劇を知る人も少なくなり、歴史上の出来事としてだんだんと風化して行くのでしよう。

（きっかわ・たけし 82歳。島根県松江在住。2月14日の松江の自主上映会で映画「嗚呼 満蒙開拓団」を観る。民団でありながら軍隊とともに、シベリア経由でモンゴル人民共和国に送られ、2年間の強制労働に服し、1947年辛うじて日本に帰国した）